

# マルコ・ヴァラトニーヤ

ヴェルディ・イヤーの二〇一三／二〇一四シーズン開幕の舞台である新制作「リゴレット」。

注目のタイトルロールを歌うのは、世界の歌劇場から引く手あまたのヴェルディ・バリトン、マルコ・ヴァラトニーヤである。

ヴァラトニーヤにとってリゴレットは、機が熟すまで大切にしておいた「夢の役」。

昨年九月サンフランシスコで待望のロールデビューを果たし、東京は三回目の舞台となる。

ヴァラトニーヤに、現在の活躍までの道のりについて、そして「リゴレット」への思いをたっぷりうかがった。

## ほぼ独学で「世界のヴェルディ・バリトン」へ

——日本へはフェニーチェ歌劇場の公演でいらしたことがありますね。

**ヴァラトニーヤ**(以下V)・「そうですね。二〇〇一年の「シモン・ボッカネグラ」に出演しました。まだ私がデビューしてまもない頃です。パオロ・アルビアーニ役を歌いました。全幕オペラの本格的なプロダクションに参加したのは、これが二作品目でした。

——それに先立つ記念すべきデビューは？

**V**・「二〇〇〇年にトリエステのヴェルディ歌劇場で「スティッフエーリオ」のスタンカー役で登場しました。それ以前は、イタリアのラ・スベツィア生まれ。2000年にオペラデビュー。その後、フェニーチェ歌劇場、シュトゥットガルト歌劇場、ベルリン州立歌劇場、ヴェローナ野外音楽祭、英国ロイヤル・オペラ、バイエルン州立歌劇場、ザクセン州立歌劇場、ミラノ・スカラ座、ポローニヤ歌劇場、ウィーン国立歌劇場など世界の一流歌劇場で活躍。最近ではウィーン国立歌劇場「アンドレア・シェニエ」ジェラルド、ハンブルク州立歌劇場「リゴレット」タイトルロールと「トスカ」スカルピア、チューリヒ歌劇場、パルセロナのリセウ劇場、メトロポリタン歌劇場「オテロ」イアーゴなどを歌う。新国立劇場初登場。

## ついに「夢の役」

### リゴレットを歌う時期がきた

——ヴァラトニーヤさんは「ヴェルディ・バリトン」と呼ばれ、世界のメジャーなオペラハウスで歌われています。重要な劇場はこの十年でほぼ制覇しましたね。

**V**・「この三月についてメトロポリタン歌劇場デビューもして、幸せです。昨年の段階で、残すはメトとパリのバステイーユのみ、でした。メトの舞台に立てたときには心が震えましたよ。バステイーユも来年「トスカ」でのデビューが決まりました。

——その記念すべきメト・デビューについて教えてください。

**V**・「「オテロ」のイアーゴ役でした。イアーゴはすでに十年ほど歌い続けている役で、役への挑戦という段階はすでにクリアして、いつでも落ち着いた気分で歌えます。ですので、今回の気持ちの高ぶりはメトという特別な場所のためでしたね。自分でも、普段と桁ちがいのエネルギーを蓄えて臨んだ、って感じですよ。

——そうすると「リゴレットは？」と聞きたくなります。まだ挑戦してまもない役ですよ。

**V**・「はい、私のリゴレット・デビューは昨年九月、サンフランシスコ・オペラでマエストロ・ルイゾッティが指揮された舞台です。ああ、これも

ビューしました。音楽をきちんと勉強し始めて六か月目のデビューでした。

——たった半年で！ 音楽の前に、なにか楽器を勉強されていたとか？

**V**・「いいえ、なにも。歌だけなんです。

——ますます信じられません。この舞台は映像にもなっていますね。指揮はニコラ・ルイゾッティで。マエストロ・ルイゾッティとはこの頃からのご縁なのですね。

**V**・「はい、かれこれ十二年間たびたび一緒に過ごしていたいです。

——舞台映えのする立派な体をお持ちですが、スポーツの経験は？

**V**・「子供の頃から運動は得意でした。中学校からずっとバスケットボールをしていました。タイ式のキックボクシングも経験があります。

——体格に恵まれているのは、発声にも有利でしようか？

**V**・「そう思います。音楽は、ほとんど独学です。

——本当に素晴らしい体験でした！ それまでリゴレットは自分としてはまだ歌いたくない役だったんです。歌手として当時すでに三十二の役柄を歌い、レパートリーとしていました。ヴェルディ、プッチーニ、モンテヴェルディのバリトンの役を、ほぼすべてカバーしています。けれどもリゴレットは本当に最後の最後、バリトンとしてありとあらゆる舞台の経験を積み、それらの経験をすべて一箇所に集結させるような役だ、と考えていたからです。そこで決定的に考えないにしても、半端な舞台経験では歌えない役でしょう。

——ヴァラトニーヤさんは他のインタビュで、リゴレットのことを「夢の役柄」とおっしゃっていましたね。そして、いよいよ機が熟した？

**V**・「はい、歌つてもよい時期に入ったと思います。そうしたら自分の背中を押すかのように、オファーが来ました。昨年九月のサンフランシスコでのロールデビューに続き、今年一月にはフランスのリモージュでの二度目のリゴレット、そして東京になります。はやる気持ちが鎮まり、この役も自分のものになりつつあります。

——リゴレットは誰もが認める難役ですが、ヴァラトニーヤさんの解釈では一体どんな男なのでしょう？

**V**・「リゴレットは、自分自身との闘いを強いられた男です。彼が矛盾から解放される唯一の契機が娘ジルダの存在です。自分に正直になるために、彼にはこの娘が必要で、それを行き詰まるストーリーのなかで再確認していくのですが、残酷なのは、彼が普段、身近などんな人をもからかい、馬鹿にするという対人法を職業として生きてきたために、最後に恐るしいしっぺ返しを受ける、ということです。ねじれた自分を見せ続けた結果、幸



2011年 ミラノ・スカラ座「アッティラ」より

最後の「まとも」の段で先生についたのですが、それまで自分の信じる歌い方です。あれこれ模索してスタイルを作りました。ですので、筋肉の使い方、呼吸の方法などを考えたとき、また、舞台上での動作を練るとき、スポーツの経験は非常に役に立ちました。

私は十七歳のときに音楽院の入学試験を受けて合格したのですが、何回か通って授業の内容にあまり興味を持てず……。ただ、たとえ音楽院からは足が遠のいても、私の興味はすでに、断然、オペラでした。家族もオペラ好きでしたし、祖父は若い頃にテノール歌手だったんですよ。でも、「いつか世界的なオペラ歌手になる」なんて同級生には打ち明けられませんでした。笑われるに決まっていたから(笑)。ですので、こっそり、でも一生懸命、歌っていたわけです。

——お手本としてきたバリトン歌手はいますか？

**V**・「デビューのきっかけはピエロ・カップッチリ音楽コンクールでの入賞だったんですが、それを切望する本音もまた、他人に届かないのです。リモージュでのド・カルパントリ版は、興味深い演出でした。宮廷で道化の仕事をするために、せむし男の衣裳を着ける、でも家に帰れば普通の男、という設定でした。バリトン歌手としても考えるところが大きかったですよ。バリトンにもブッフオ、リリコ、ドラマティコ、の異なる声質がありますが、リゴレットはこの三種類のすべてを駆使する役とも言えます。みな、歌うに当たり苦労するのです。それに加え、このような演出だと、心理に踏み込んだ部分での演劇的表現力も問われますし、いい勉強になりました。

——新国立劇場ではどのような演出になるのか楽しみですね。

**V**・「演出家によって当然アプローチが異なるわけですが、リゴレットの解釈については、葛藤する彼の内面を演出することが必ず問われます。そのために演じる側が頼みとするのは、自身の体がどう動くのか、自分の声がそれをどう伝えるのか、それ以外にない、ということですよ。主人公の内面が強くにじみ出なければ、嘘の舞台になってしまう。

——最後に日本の観客にむけてメッセージを。  
**V**・「日本のオペラ・ファンは素晴らしいです！ 前回の日本公演で感動したのですよ。そんな皆さんとの再会が待ち遠しいです。エージェンツから「東京でリゴレットが決まったから頑張ってください」と連絡が入ったときは胸が躍りました。全力で仕事に向かいます。東京で開ける今シーズンは、そのあとシアトル、メルボルンでも「リゴレット」が続きます。まさにリゴレットに全力投球のシーズンになります。どうぞ楽しみにしてくださいね。

## リゴレット

10/3(木)～10/22(火)

会員販売期間 5/26(日)～6/4(火) 一般発売日 6/8(土)